

# 越境女性たちの移住先での定着とジェンダー —元在日脱北者の日本暮らしを事例に

李仁子 Yi In-ja

東北大学 *Tohoku University*

## 1. 問題の所在

本発表は、現在調査中の研究を紹介するものである。そのため、ジェンダーの研究分野に貢献できるような理論化はまだなされていないことを最初に断っておく。むしろ今後の研究に関する背景説明と同時に研究の可能性を探るものとして理解して頂ければ幸いである。

本発表は私がこれまで進めてきた在日コリアン研究をその基盤としている。在日といっても決して一枚岩とは言えない多様性があるため、そのことを考慮して特に集住の傾向が見られる済州道出身の在日をこれまで主に研究してきた。済州道の中でも高内里（コネリ）という小さな村の出身者を対象に、戦前からの移住の歴史、戦後の東京での生活基盤づくりの過程、日韓国交正常化後の60年代から90年代に至る彼らの故郷との付き合いの変遷などを明らかにしてきた。研究方法としては、東京の荒川と済州道コネリでのフィールドワークが中心であったが、同時に多くの文献資料を収集・分析した。中でも各名字ごとに伝えられている家系図（族譜<sup>1</sup>）と村の歴史を整理した高内里史、さらに1949年から発行された東京在住の親睦会メンバーによる「機関紙」などの史料は、聞き取り調査の結果と突き合わせることで、埋もれた歴史を探る最良の手だてとなってくれた。

ジェンダーの問題を考えると、女性と男性という安易な分類で論を進めていくことの危うさは、従来の多くのジェンダー研究でも指摘されているとおりである。本発表では、法や政策の領域にまで至らないマイノリティのジェンダーのあり方に関して考察することを目的としている。具体的には、元在日コリアンであった人およびその子孫たちで、北朝鮮に一度帰国し、再び日本に戻った人たちのことを対象にしている。本発表ではその人たちのことを特に脱北帰国者と呼ぶことにする。

脱北者の研究は現在韓国において活発に行われている。その研究は主に「適応」に重点を置いたものである。例えば、政府の制度的支援関連の議論

や適応プログラム関連の議論といったものである。しかし、移住者を適応させる対象と見るため、「適応／不適応」のまなざしで評価しがちになるという問題を孕んでいる。移住者の欲求を代弁するような研究でも、適応上の問題点に焦点を当てているため「問題ある集団」「不安定な要素を抱えている集団」というレッテルを強化させる結果になりかねない。また、韓国で行われている脱北者に関する研究には、性別を意識したものがほとんどないといっても過言ではない状況である。適応の言説においても男性中心のものが多し。本発表では、移住後の女性の生活文化に焦点を当てた研究の見通しと可能性を述べることを目指している。

## 2. 在日コリアンの北朝鮮への帰国運動

いわゆる「帰国運動」によって在日コリアンが北朝鮮に帰国し始めたのは、1959年12月である。第一次帰国船で帰った人は3,942人で、1968年までに8万8千人、1984年までには9万3千人が帰国することになる。当時の日本社会のなかで生活していた在日コリアンは、根強い民族差別に苦しめられ、生活も貧窮している人が多かった。また、出身地から考えれば、90%以上の在日が南の韓国を故郷にしていたのだが、当時の韓国は政治的にも経済的にも北朝鮮より不安定な状況であったため北に向かう人の数は多くなったといえる。さらに拍車をかけたのは、日本の言論報道である。「地上の楽園」と北朝鮮をもちあげる記事が大手の新聞紙面を飾っていた。日本政府の姿勢も帰国運動に協力的であったといえよう。

帰国する人たちは、様々な思いを抱いて日本を発つ船に乗った。一概にはいえないが、初期の帰国者の中には在日コリアン社会で指導者格にあった人たちが多く、祖国の建設に役立つような人生を送りたいという抱負をもっていた。また、子どもたちが差別のない社会で思う存分学ぶことができることを願って北に向かう人も多かった。もちろん一部には、日本社会でうまく適応できず様々な問題にまきこまれ、逃げるように帰国船に乗った人もいた。彼らは、後に北朝鮮の社会で帰国者が厳しく管理されるようになる要因ともなった。

帰国した当時の様子は、日本の報道資料や文献からも知ることができたが、直接会ったインフォーマントの話は臨場感が溢れたものだった。帰国者を乗せた船が最初の入港地である青津に到着したときの話をしてくれた元北朝鮮幹部は、今は韓国に亡命して暮らしているが、当時は帰国者接待の責任者で、第一次の船が入ったときのことを鮮明に記憶していた。清津では大勢の市民

が動員され、歓迎の列を作って、海の向こうから入ってくる船の姿を見つけて造花を振りながら歓声を上げ、船の上でも慶びに溢れた人たちが抱き合ったり歌を歌ったり両手を上げて踊る様子が見てとれたという。しかし、港と船の距離が近づき、互いの姿がよく見えるようになるにつれ、清津の人たちも船の上の人たちも驚きで動きが止まり歓声もなくなった。船に乗ってきた人たちは「地上の楽園」とはほど遠い市民たちの身なりや港の様子に驚き、迎えに来た清津の市民たちは、日本で酷い差別を受けまるで乞食のような同胞を我々が暖かく迎えるべきだと聞かされていたのに、着ているものや顔の様子から自分たちよりはるかにいい生活が窺えることに驚いたのである。話をしてくれた元幹部の人でさえ驚き、混乱したという。それでも責任者である彼は、まず歓迎に出てきた市民を帰し、泣きわめく帰国者たちを宿舎に案内するなど、後始末に追われた。市民も交えて行う予定であった歓迎会は修羅場が予想されたため中止になったという。中でも忘れられない記憶として、宿舎で夜中まで泣き続ける子どもたちに「祖国に戻った慶びが大きすぎて泣くのは理解できるが、他の部屋の人に迷惑になるのもうお休みになって下さい。その慶びはこれからも堪能できますので」と心にもない言葉を言いながら帰国者の部屋を回ったことだという。

帰国者に対する北朝鮮の住民や政府の態度は時間とともに、そしていくつかの状況の変化によって移り変わっていく。すべてが配給制であり、居住地も指定される施策の下でも、帰国者は当初優遇されたといわれる。雑穀よりお米の量を多めにもらったり居住地も首都の平壤に配置される人が多かった。住居の配給においても、その地区でも部屋数が多く条件の良い家が割り当てられていたという。しかし、1967年から帰国者への待遇が一変し、都市から炭坑の街に追放されたり、家族が気付かないうちに逮捕され行方不明になったりするような事態が起り始めた。資本主義社会に慣れた帰国者の言動は、たとえ本人たちが気を遣っていても北朝鮮では十分に反動的に映ったのである。帰国者たちに新たな転機が訪れたのは、日本に残っていた家族や親戚が「祖国訪問」をするようになった1985年である。在日の人たちが北朝鮮に帰国した親兄弟や親戚に会うために北朝鮮を訪問したところ、行方不明になった人が多く、結局会えなかったというケースが続出したことから、日本の在日朝鮮総連合会（朝鮮総連）の幹部たちが直接金日成に異議申し立てをしたのがきっかけで、帰国者たちの地位がいくらか改善されるようになった。在日からの金銭的支援が必要であった北朝鮮ならではの政策的配慮であった。北朝鮮に家族を帰国させた在日の中には、40余年もの間ずっとお金や荷物（北朝鮮でお金になりそうなもの）を送り続けた家族も少なくない。しかし、親や兄弟のように近い関係の親族が高齢で亡くなったり、経済

的に没落するなどしたために送金などが途絶えた帰国者も大勢いる。日本からの援助がない帰国者は北朝鮮の現地の人たちよりも悲惨な生活を強いられていると国境を越えてきた人たちは伝えている。

### 3. 女性たちの移動とジェンダー（北朝鮮、中国、韓国、日本）

北朝鮮でのそうした境遇をなんとかくぐり抜けた末に脱出し、日本や韓国に移住した元帰国者たちは、現在のところに定着するまで、生活の場を転々と移しながら生き延びてきた。表1は、私が調査した韓国と日本に定着している脱北帰国者の女性たちの一覧である。詳しい経路はまだ書けない部分もあるが、7番の今井さん以外の人は日本から親に連れられ北朝鮮へ帰国、そこで30余年以上暮らし、北朝鮮を出国後は第3国（たいていは中国）を1年から4年ものあいだ転々とした末にようやく日本や韓国にたどり着いている。

15歳以上になってから日本を離れた人たちに話を聞くと、日本と北朝鮮でのジェンダーのあり方があまりにも違ったという。当時すでに仕事をしていた人は、日本ではお酒やたばこなどを楽しんでいたのに、北では遊びなどがほとんどなく実に息苦しかったといっていた。結婚も見合いが多く、帰国者同士の結婚がほとんどであった。北朝鮮では「成分」という人民をランクづける制度があるが、帰国者は非常に低い地位に置かれていた。朝鮮戦争の時に韓国に逃げた人たち（裏切り者）の家族と同じ成分であるということから、その低さはおおよそ見当が付くであろう。北朝鮮での結婚は同じ成分同士の結婚が好まれるため、現地の人たちは帰国者との結婚を忌避するのが普通であった。しかし、日本からの援助で生活のレベルが高い帰国者のことを、結婚以外のことで差別することは難しかったようである。

社会主義の北朝鮮では、男女のあり方や嫁姑の関係において昔ながらの考え方を「封建主義」と名付け、男女平等や協力し合う仲間であることを理想とし、そのように子どもたちを教育している。インフォーマントたちの話によれば、帰国者の家庭の方がより「封建的」とであるという。特に姑との関係はより厳しく、夫の家族には常に気を遣わないといけなかったという<sup>2</sup>。その時に強調されるのは、「我々は帰国者である」ということであった。北朝鮮で生活しながらも日本で生まれ育ったり生活をしていたことで現地の人たちからの差異化を図っていたのである。日本からの帰国者としてのアイデンティティはわりあい作りやすかった。帰国当時、親の意志で連れて行かれた子供であったインフォーマントたちは、北朝鮮への帰国を喜んでいなかった。



表1【インフォーマント一覧】

番号	名前	年齢	入国年度	帰国年度	出身地	家族状況	北朝鮮での職業	現職
1	李スヒ	52歳	1998年	1961年	名古屋	息子3人	教員	事務職
2	金ジョミ	61歳	1995年	1960年	青森	夫、息子、孫2人	主婦	主婦
3	李チャンミ	55歳	2001年	1962年	大阪	夫、次女、長女は1年後に入国	主婦	主婦
4	朴サンモ	58歳	2002年	1960年	大阪	長男(6ヶ月先に入国)、次男、娘、長男の配偶者、孫、夫(日本滞在中)	主婦	主婦
5	文イス	55歳	1999年	1961年	高知	長男、長女夫婦、次男・次女・妻は3年後に入国	事務職	無職
6	李スリョン	53歳	2002年	1961年	大阪	長男夫婦	主婦	主婦
7	今井福子	38歳	1999年	北朝鮮出身		夫、息子、娘	主婦	主婦
8	菅原義子	52歳	2000年	1967年	大阪	長男、夫は中国で北朝鮮に強制送還、次男は父を探しに行き行方不明	医療関係	医療関係
9	福井洋子	56歳	2000年	1963年	福岡	夫、2人の息子は1年後に入国	主婦	主婦
10	金村良子	58歳	2001年	1962年	大阪	次男、夫は中国で北朝鮮に強制送還	主婦	主婦

※ 名前はすべて仮名です。

たとえ自ら望んでいたとしても、日本での生活とのあまりの落差に日本を恋しがらばかりになっていた。わりと幼いときに帰国した人は、日本での生活がそれほど記憶にないぶん、移住先での適応に障碍がなかったようだが、中学生ぐらいの年齢に達していた人は大変だった。

また北朝鮮を脱出するようになった原因の一つである生活苦は、女性や子供の役割を大きく変えたという。配給が少なくなるにつれ、幼い子どもや女性がいっぱいの密売に携わるようになったという。インフォーマントの中にも夫が先に国境を越え中国に行ったため、残された妻と子供だけが北朝鮮での苦しい生活を強いられたケースがある。それは日本や韓国での定着のあり方に見られる差異とも深く関わる問題であるが、別の機会にふれることにする。

国境を無事に越えても、中国に入ってから生活は人目を避けた潜伏の日々が続く。信頼できる人はどこにもいないと思わなければ生きていけない状態である。中国人を雇うぐらいの金銭的余裕がない限り、男性は女性よりも危険にさらされるという。日本の親族からの援助で多額の現金を持っていたのにもかかわらず、そのお金が災いして金だけだまし取られた後に公安に密告され、北朝鮮に追放されて行方が分からなくなった人もいる。現在日本でその妻と子どもだけが無事に暮らしている。

今日、中国で難民生活を送っている北朝鮮移住民は20万人以上ともいわれている。韓国に無事亡命できる人の割合はこのところ女性の方が男性をは

るかに上回っている。隠れて生活をするのには男性より女性の方がいろいろな面で適しているからであろう。北朝鮮では女性の貞操は固く守るべきものとして教育しているという。韓国や日本に定着している若い世代の脱北者たちに話を聞いても、乱れているように見える男女関係に対しては批判的な目を持っていた。しかし、中国での苦しい難民生活においては、窮地に陥って中国の男性と望まない結婚をしたり、性を商売としている店に勤めたりすることで延命した女性は大勢いる。幸いそのような立場に追いやられなくても、状況によっては受け入れる心づもりでいた女性も多い。難民暮らしでなければ女性を守る役を担う夫や父親たちにとっても、中国での潜伏生活の中ではむしろそうした女性たちに頼る存在であったことは、後々安全な地に定着してからでも消えない深い傷になっている部分である。未婚の女性の場合、結婚の相手として自分の境遇を理解してくれるような男性を探すようになり、その結果、脱北者同士の結婚が多くなっている。脱北者の中国での難民生活は、ジェンダー研究において大変重要な部分である。生死をかけた局面で、内面化していたジェンダー規範を大いに逸脱せざるを得ない状況を強いられた経験を持つ人は、再び安定した環境に戻ることができた時、その限界状況で負った傷をどのように癒していけるのだろうか。

#### 4. 女性たちの定着—移住先での安住への模索

激しい環境の変化によって生じる不安は女性のみならず、脱北者であれば誰もが感じることであろう。韓国政府は脱北者を公式的に受け入れているため、様々な制度を設けて彼らの韓国での定着生活を援助している<sup>3</sup>。しかし、その諸制度は、現状では仕方のないことかも知れないが、個々人の事情に個別対応したきめ細かな援助を提供するまでには至っていない。新しい社会への編入がスムーズになされるよう工夫された諸制度は、主に一家を支えると思われる男性を中心とした援助のあり方となっている。そのため、単身の女性や、夫の長い失業や病気などの事情により一家の大黒柱の役割を担っている女性などは考慮されていない面が多い。これに対し、日本は公式的には脱北者の受け入れを認めていないこともあり、行政による制度的な支援は一切行われていない。本発表で取り上げる日本在住の脱北帰国者4家族も、韓国でなら受けられたはずの援助のまったくないところで、激しい文化ギャップに戸惑いながら、それでもどうにかして自分らしさを取り戻そうと奮闘している。その姿から垣間見えるものを以下に点描してみたい。

関西の都市に定着している表1の7番から10番までの4人は、入国の年

も近く、支援団体の配慮によって年に数回は一堂に集まり交流を図っている。北朝鮮での出身地や生活ぶりなどにはかなり差があるものの、数少ない在日脱北者仲間として付き合っている。中でも今年39歳になる今井福子さんは、マンションの管理やリフォームの下請けをしている夫の仕事を金村さんと福井さんの息子が手伝っている関係上、両家とはわりと親しく付き合っている。福子さんは元在日であった夫を頼って日本に入学することになったが、彼女自身は帰国者の子孫でもなく北朝鮮出身者である。今井さん以外の夫婦は元在日で北朝鮮へ帰国した人たちである。そのためか、支援NGOの人の話によれば、入学当初は日本語に不自由さを感じる人もいたというが、時間が経つにつれ日本語や日本の生活に急速に慣れてきたという。私が彼女らの家族に会ったのは2003年の夏であるが、福子さん以外には日本語で話すことに不自由さが全く感じられないようであった。むしろ韓国語で話したときに、日本のなまりが残ったような言い方になるところが気になるほどだった。福井さんの家では、二人の息子に北朝鮮にいるときから日本語を教えていたほどで、子供も含めて日本語で困ることはないようだった。それに比べ、今井さんは帰国者の家の出身ではないため、日本語や日本の生活に関して全く馴染みがなく、みんなで集まって話をするときにも途中で日本語になったりすると会話に参加できなくなる場面もしばしばみられた。

今井さんの家族は夫婦と二人の子供の4人家族である。夫は再婚で福子さんに巡り会った。長男は帰国者であった前妻との間に生まれた子供で、今年20歳になる。5歳になる娘は、中国での難民暮らしの中で生まれた。現在は近くの保育園に通っているため、母親との会話は韓国語であるが父親とは日本語で話をしている。今井さん一家が日本にきて丸3年が経った時から調査に協力してもらうことになったが、福子さんはその間の様々な心労が溜まった状態で顔面神経痛を患っていた。3年の間、なんとか暮らしていけるようになるまでの仕事探しや子供の教育の問題、安定してからの夫の娯楽<sup>4</sup>への心配などが原因だと説明していた。夫がパチンコをしていることに関しては、日本に入学できるまで支援してくれたNGOの人たちや、中国から日本に来るまでの金銭的援助をしてくれた夫の叔父も、厳しく注意したり叱ったりしていたが、なかなかやめなかったという。私が彼女を訪れたときも二人っきりになると、日本に来てからの夫や息子の生活ぶりには付いていけないと、その苦しい胸の内を明かしていた。今井さん夫妻は夫婦ともに北朝鮮に親・兄弟を残したまま日本に来ている。厳しい生活を強いられている彼らのため、生活を切りつめながら人づてに彼らに送金をしている。福子さんは常に「このぐらいのお金であれば向こうでは何ヶ月の生活ができる」という金銭感覚である。親兄弟を残したまま自分だけが出てきた負い目もあって、少

しでも多く送金ができるよう日頃節約を心がけてきた。だからこそ、その努力を否定するかのように娯楽に多額のお金をつぎこむ夫や息子とは常にぶつかることになる。北朝鮮での生活を想起させながら息子に態度を改めるように注意しても「日本は北朝鮮とは全然違うところなんだから向こうのことははっきり考えるとダメなんだ」と逆に説教されたりもした。夫や息子が北朝鮮での生活や中国での潜伏難民生活の苦しさなどを綴った手記を見せてもらったことがある。その手記の内容からは想像もできないほど二人の金銭感覚や生活態度には変化がみられる<sup>5</sup>。

福子さん以外の家族成員は、日本の社会と様々なパイプ（保育園、学校、仕事関係）で結ばれているのに対し、主婦をしている彼女は早朝のマンション清掃以外ほとんど家の中で生活している。日本語も使う機会がないためになかなか上達しない。日本語を使うしかないような場面では、夫や息子に代わってもらっていた。日本の生活においては夫や息子に一方的に頼らざるを得ない立場であるため、息子への説教が力を持たないことも彼女が感じるもどかしさの一つであった。夫にパチンコをやめさせることに執拗とも思えるほど執着しているのも、他に自分の気持ちを分散させるすべを持っていないためだったのかも知れない。実際にそばで見ていると、保育園に通う娘と夕食を済まし、夫の仕事が終わる時間になるにつれそわそわし始める。パチンコが終わる10時まで夫が帰ってこない時には、娘の遊び相手をしていながらも夫に憤慨しているような様子が窺えることもあった。年輩の福井さんや金村さんは、生活できる十分な給料を家に入れながらの遊びだから大目に見てあげなさい、そんなことより自分のためにも日本語の勉強をもっとしなさいとアドバイスをしていた。しかし、そのアドバイスに従って日本語の勉強も手掛けてみたものの、夫のことが気になって集中できないという有様だった。同じマンションに住んでいる占い師から20万円の巨払いをすれば夫がパチンコをやめるようになると言われ、大金を払ってお願いまでした。日頃の彼女の節約ぶりや北朝鮮の家族のことを思い続ける態度からは考えられない高額の投資であったが、20万円でやめてもらえるのであれば安いと思って出したという。それほど彼女にとっては切実なことだったのである。

私は、多いときには月2回ぐらい、少なくとも月1回ぐらいのペースで今井さんの家庭にお邪魔していた。11月のある日、ほぼ1ヶ月ぶりに訪れたとき、福子さんの様子にどこことなく以前にはない余裕のようなものが感じられた。夕方夫が帰ってこなくても前ほど気にせず娘と過ごしていたり、日本語の勉強のため本を買っていたり、何より料理の本を参考に新しい料理に挑戦していたのである。料理器具の使い方なども説明書を出して積極的に聞いてきたりしていた。市役所や保育園からの郵便物で分からなかったものは、

私が次に訪れたときにどのようにすればいいかを聞くためにとっておいたという。どれも以前にはみられなかった生活への積極的な姿勢である。何か夫がパチンコをやめたとか、子供にいいことでもあったのかと聞く私に「特別に変わったことはないけど洋子さんのお家に遊びに行ったり彼女と一緒に買い物に出かけたりするようになった」という。夫がパチンコをすることに関しても、以前より気にならなくなったという。

福子さんと交流を深めていた福井洋子さんは、北朝鮮でも一握りの、格別によい生活をしてきた帰国者であった。夫は共産党の党员で、彼女自身も幹部たちとの付き合いが頻繁にあるような仕事をしていたという。30代になっている二人の息子も北朝鮮ではエリートとして育てられ、それぞれの専門分野で指導者として働いていた。そのような恵まれた境遇の一家が脱北するようになったのは、生活苦によるものではなく、政治的な要因によるところが大きい。洋子さんが任されていた政府の仕事をうまくまとめられなかったことで、今までの経緯から追放か粛清されそうだったため、家族全員で北朝鮮を後にしたのである。現在、夫や二人の息子は北朝鮮ではやったこともない単純労働で生活を支えている。洋子さんは「北朝鮮にいるときには、ほしいものは何でも手に入った。日本に来てものは溢れているが自分のものになるものは少ない。北朝鮮での生活の方がはるかに楽でいい暮らしができた」という。日本にいる親戚から金銭や荷物などが定期的に届いていたため贅沢な生活を送ることができたのである。家にテレビが2台あり、1台は韓国の放送を見るためのものとして隠して使っていたという。早くから韓国の経済発展についても知っていたし、韓国ドラマまでも楽しんでいたという。住んでいた地域もサリウォンという外国人や中枢の幹部たちが住んでいるところだった。北朝鮮で生活しているときには、日本にいる兄弟や夫の両親の援助のおかげで身につけるものはほとんど日本製であったという。脱北者の中でも元帰国者は洗練された人が多い。洋子さんに初めて会ったときに、日本の都会に住む中年女性と何ら変わりのない姿に感心した記憶がある。

洋子さんは福子さんのことを妹のように思い、生活全般にわたる様々なアドバイスをしていた。常に福子さんに女性は女性らしく美しく自分を磨くことができないといけないといいながら衣類の買い物に助言したりしていた。11月に私が福子さんを訪ねたときは、洋子さんの二男が福子さんの夫の下で仕事をするようになり、今井家に出入りするようになって一ヶ月ぐらい経った頃だった。息子が今井家で仕事をすることで頻繁に女性同士交流するようになり、互いの生活ぶりがみえるようになったようだった。仕事をしている二人は、お弁当を持参して今井家で昼食を一緒に食べる。写真は洋子さんの息子が初めて仕事に来た日の二人のお弁当の写真である。このお弁当は洋





子さんが作ったもので、料理の本から出てきたようにきれいである。洋子さんは料理が好きで、日本語の読み書きに何ら不自由がないため日本料理の本を参考によく料理をすると以前から言っていた。きれいなお弁当には福子さんも驚いたようだった。福子さんの場合、北朝鮮の中でも配給が少ない貧しい田舎の出身である。北朝鮮での生活を振り返って書いた彼女のノートには、物資の不足による厳しい暮らしぶりがよく現れていた。例えば、食糧がないとき草でおもちやお粥などを作って売ったり食べた

りしたことが書かれてあるページには、その作り方で丁寧に書き込まれていた。延命のため草でも食べ物にする「生活力」を福子さんは持っていたのである。北朝鮮とうってかわって日本は、多様な食材を使いこなせる「消費力」が要求される社会なのかも知れない。ものは溢れ購買できる力があっても消費の仕方が全く分からない福子さんは、ある意味で日本にいながら北朝鮮を生きているようなところがあった。日本の消費生活に戸惑いを覚えたり付いていけなかった福子さんは、うまくやりこなせている洋子さんを案内人としてそこに参入したかったのかも知れない。11月に私が訪れたときに

目にした様々な変化はそのあたりに主因があったのだろう。日本に来ている以上、北朝鮮での生活ばかりを考えるのではなく、より自分の身の回りのことに気を遣い、子供や家族のために料理を工夫し、日本語の勉強も始めていたのである。そうすることによって、以前は気になって生活ができないほどであった夫のパチンコに関しても「生活費さえ入れてくれればいい」と思えるようになったのである。

## 5. 脱北女性たちの定着過程におけるジェンダー問題

本発表では、調査途中にある脱北者のジェンダーをテーマに、まだ整理する前の、しかし大事だと思われるいくつかの部分点を点描してきた。その過程でこれからのジェンダー研究において重要と思われる課題が二つほど浮上してきた。その一つは、身につけたジェンダー規範を気にしなくなる状況に関してである。安定した環境におかれジェンダー規範に関して葛藤がなく満たされているときにも人はそれを気にしないであろう。しかし、ここで問題になるのはその反対の場合である。北朝鮮の国境を越え、中国に入ってから生活は女性にも男性にも悲惨な現実そのものである。女性たちは自文化で内面化している貞操を命よりも大事にするべきだという規範を気にしては自分や家族が生き延びることすらできないような極限状況に直面する。そこでは規範はいったん解除されなければならない。気にし続けた人は生き残らない。しかし、極限状態の中国では気にすることさえできなかったため、気にならなかったジェンダー規範は、むしろ無事韓国に入国できてから厄介な問題を引き起こす。修羅場をくぐり抜けた女性たちは、安定した幸せを得るために韓国人の男性と結婚したいと思うものの、自らの過去に根差す後ろめたさから積極的になれない。脱北者の独身男女の多くは、韓国入国後の社会再教育機関であるハナウォンでの一ヶ月の教育期間に脱北者同士で付き合い始めることが多く、教育期間終了後すぐに結婚するケースが多くみられる。ハナウォンには教育が終わった先輩格の知り合いなどが自由に出入りできるため、教育を受けている側に様々なアドバイスをしていく。男は安定するためには結婚するべきこと、韓国の女性とはまず結婚できないのでハナウォンの教育期間中に誰かと付き合うべきことなどである。そのようなアドバイスを受けた男性たちは、同じ期間に教育を受けている独身女性に積極的にアプローチする。彼らの武器は、女性たちに向けた次のようなアピールの言葉である。「中国でのことは韓国人には理解できなくても自分にはできる」というものである。たとえ結婚する気にならなくても、あまりに積極的なアプロ

一ちや新しい生活への不安なども手伝って付き合うことになる。最初から男性に理解してもらったという負い目を背負って新しい生活を始めることになるので、女性は不利な立場に置かれる。しかも、教育期間が終わりいざ韓国社会に出てみると、中国ほどではないが脱北者の特に男性にとって生きにくい仕組みになっている。長い不況のため脱北者にまでまわってくる仕事は限られているのである。多くの場合、女性の方が先に就職して生活を担っている。ハナウォンで付き合いすぐ結婚した女性のなかには、北朝鮮より女性の地位が高い韓国社会を目のあたりにして、経済力までない夫に深い不満を抱く人も多い。女性たちは過去に対する負い目と夫への不満のジレンマから心労を募らせていくように思われる。この辺りの事情は、脱北者女性の研究において避けて通れない問題であろう。

もう一つは、福子さんの事例でもその片鱗がみられた、不安な状態から少しでも社会になれていこうとする意欲はどのように表出されるのかという問題である。主婦である彼女は、新しい移住先の日本社会に踏み込める機会が家族の中で一番閉ざされていた。そのため、誰よりも北朝鮮での生活に執着を持ったり北に残された家族のことを思いながら日本での生活を送っていたのである。夫や息子は仕事場や学校などでいろいろな状況に出会い、その度に日本の文化や暗黙のルールを肌で感じるうちに、自分たちの基準になるものがすでに北朝鮮のものではなく新しい定着先のものに入れ替わっているのに比べ、日頃外界との関わりが少なく、ほとんど家族と接するだけだった福子さんは、3年という時間が経っても北朝鮮での生活から得ていた基準でものごとをはかろうとしていたために、他の家族成員との葛藤も大きくなり、解決策も探しにくくなっていたのかも知れない。そこから少しずつ抜け出るきっかけになったのが、同じ境遇の洋子さんの生活ぶりを見せてもらうことだった。自らもやってみたいという意欲を刺激されたのだろう。

福子さんの事例から、脱北者女性の生活における葛藤はより近い関係の家族間の問題であることがわかる。その際、外とのパイプを作ることが不利な彼女にとって同じ脱北女性の存在は大きい。互いの交流によって葛藤を解消するすべを見つかったり、なれない日本の生活に関して率直に見せ合うことで楽になったりする様子が見られる。細々ではあるが日本の中で彼/彼女らへの支援を考える団体が現れている。今は体制が違ふところへの（社会主義社会から資本主義社会へ）移行をどのようにすればいいかに重点を置いている段階である。しかし、強い信頼関係で結ばれた脱北者同士のネットワークの大切さを認め、彼ら同士のネットワークが自ら作れるよう手伝うことこそ最優先させる支援であろう。



## 注

- <sup>1</sup> ある家門、一族の代々の家系を父系血縁関係に従って記した書。男子のみ名前を記載される。多くの場合、ある宗族のなかのひとつの派ごとに族譜を持っている。専門的な知識がないと相当読みづらいものである。
- <sup>2</sup> 「封建的」という言葉の使い方は誤解を招くおそれがある。北朝鮮で社会主義を唱えるために封建的なものは打破しなければならないものであると主張している。しかし、実際には男女平等は絵に描いた餅に過ぎず、姑との関係においても一方的に嫁の方が夫の家族によくすることが称賛される映画なども多い。何をもって封建的とするか、その基準自体が男性に都合良くできているきらいがある。にもかかわらず、帰国者の女性たちが自分たちの方がより封建的な生活の中で苦しめられたと感じているのは興味深いことである。
- <sup>3</sup> 韓国政府は、脱北者たちに一ヶ月の生活指導を施した後、定着金として3000万ウォン（日本の300万円相当）と永久貸与のマンションを与えている。家賃は相場価格の10%以下であり、しかも貸与単位が家族ごとではないため、一家で何軒ものマンションを得ているケースもかなりある。未婚の人でも入国の時期がずれた場合は、定着金とマンションが与えられる。
- <sup>4</sup> 日本語ができない福子さんに代わってマンションの管理をしていた息子は、あることに大金を使い込むことになり、それを両親が返済するという事件を起こした。また、夫は代表的な大衆娯楽であるパチンコにはまり、仕事はこなしつつも暇さえあればパチンコに通っていたため、その間に頻繁にかかってくる電話や訪問してくる来客は、その度に日本語のできない福子さんを不安にさせていた。
- <sup>5</sup> 400字詰め原稿用紙350枚ほどの息子さんの手記には、北朝鮮に母親と二人きりで残されたときにどのように協力し合って困難を乗り越えたのかといった内容が書かれている。まだ中学生だった彼は、学校をやめて母を手伝いながら細々と商売をしてどうにか食いつないでいた。

## Abstract

本報告では、韓国および日本にすむ北朝鮮移住民の女性のジェンダーについて考察する。脱北者の女性たちは、北朝鮮の生活で内面化したジェンダー規範にこだわらず、生きることを優先することで中国での極限的な生活を切り抜けざるを得ないことも多い。しかしそのような状況は後日夫に対する負い目となることがあり、韓国での生活力の乏しい夫への不満と、過去の負い目との間で心労を募らせる原因ともなる。また日本に移住したある女性も、日本社会との接点を持つことが難しかったことが夫への不満を募らせる一因となっていた。しかしこの女性の事例では、日本の社会をより経験しているほかの女性との買い物や料理といった日常的な交流が、日本社会での生き方を探すきっかけになっている。これは、法や政策の領域で支援を考えている現在の支援のあり方と同時に日常生活についてみるのが、マイノリティーのジェンダーを考える際には重要であることを示している。